東奥日報
2013年（平成25年）
8月22日（木）
東奥日報社
〒030-0180
青森市第二問屋町3丁目1番89号
©東奥日報社　2013

増える高齢単身世帯、極度の貧困―

遺品整理 透ける孤独

身寄りのない人の「遺品整理」や、生きているうちに身の回りの物を片付けておく「生前整理」の需要が増えている。あまり知られていない整理請負業務の実態を、県内の業者に聞いた。見えてきたのは、高齢単身世帯の増加、孤独死、極度の貧困―といった、表には出てこない現代社会の実相やひずみだった。（菊谷賢）

近年依頼が増えている遺品整理。モコのスタッフは、依頼者の気持ちを受けて丁寧に物品を選別する＝8月（モコ提供）

県内業者「見守りあれば…」

7月末、津軽地方の住宅で孤独死が見つかった。70代の男性で、死後1カ月程度。腐乱が進んでいた。遺品整理と清掃の依頼が、遺品整理業「モコ」（青森市）に寄せられた。依頼したのは、県外に住む家族だった。

8月上旬、感染症を防ぐための防護服を身に着けた「モコ」のスタッフ4人が住宅を訪れ、廃棄する物とリサイクルする物を選別。特殊な洗剤で、染みついた体液などを洗い流し、薬を使って殺虫・除菌し、住宅を以前のようにきれいにした。

「孤独死に伴う仕事は増えています」と同社の花輪隆俊代表（46）。「冬に凍死して、今年5月に発見されたケースもありました」

以前、中古家電の買い取りの仕事をしていた花輪代表は、5年前に遺品整理の仕事を始めた。遺品整理の依頼は月5、6件。孤独死などに伴う「特殊清掃」は月2～5件ある。

依頼主は、故人の家族や不動産業者がほとんど。家族からの依頼の場合、以前は県外が約7割だったが、現在は県内と県外が半々。花輪代表は「県内でも遺品整理業が認知されてきている」とみる。

「この仕事は、故人の物を大切にする気遣いが必要。体力と経験も重要。慣れていないスタッフは、現場のにおいや悲惨な状況を見て、体調を崩す人もいる」（花輪代表）

遺品整理は、遺体と直接対面することはないものの、部屋の様子から、故人の生活ぶりや生き方、家族環境をうかがい知ることができる。

以前引き受けた孤独死のケースでは、6畳一間のアパートに、マットレスと掛け布団、歯ブラシとコップぐらいしか残されていなかった。家財道具、家電製品はなかった。住んでいた人は生活保護を受け、切り詰めた生活を送っていたという。

遺品整理のほか、生きているうちに、身の回りの物とともに、心も整理したい―と「生前整理」を申し込む人も増えている。「自分の死後、家族に手間を掛けさせたくない」「老人ホームに入居するため、空き家になってしまう自宅を片付けたい」という要望も。

一方で、健康管理や清掃など、生活する上で当然すべき行為を一切行わなくなった「セルフネグレクト」（自己放任）の人が住んでいた〝ごみ屋敷〟を片付けることもある。

高齢単身世帯の増加、親戚・近所付き合いの希薄化、極度の貧困世帯の存在を目の当たりにして、「考えさせられることが多い」と花輪代表。「孤独死は、40～50代の比較的若い世代でもある。若いが故に見守りが行き届いていない。誰にもみとられず、寂しく息を引き取ることほど悲しいことはない。孤独死を防ぐ、見守りの仕組みづくりはできないものか」と語った。

有資格者 県内13人

一般社団法人・遺品整理士認定協会（北海道千歳市）によると、廃棄物処理の関連法などを勉強して同協会の遺品整理の資格を取得しているのは8月19日現在、全国で2776人、県内には「モコ」の花輪代表を含め13人。花輪代表によると、県内には遺品整理業者が数社あるという。

「モコ」では、遺品整理・生前整理で、リサイクルできる物がある場合、依頼者から買い取り、その分を見積価格から差し引いている。極力ごみを出さない取り組みや、衣服などをボランティア団体に寄付する活動も実施している。

同社の遺品整理の料金の目安は、部屋の広さが1K（作業員2人）で4万円から、1DK（同2人）が6万円から、1LDK（同3人）が10万円から―などとなっている。（菊谷賢）